九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

黄庭堅による蘇軾追悼の詩 ： 「帰去来兮辞」の追和に代わるもの

原田, 愛
金沢大学 ： 准教授

https://doi.org/10.15017/1906422

出版情報：中国文学論集. 46, pp.19-36, 2017-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

黄庭堅による蘇軾追悼の詩

――「帰去来兮辞」の追和に代わるもの――

原田　愛

北宋の文人蘇軾（字は子瞻、号は東坡居士）は、元祐七年（一〇九二）夏に揚州において詠んだ「和陶飲酒二十首」を皮切りに、恵州に流謫された翌年の紹聖二年（一〇九五）三月四日に二作目の「和陶歸園田居六首」を詠み、それから元符三年（一一〇〇）二月まで陶淵明の詩文に継和を行い、最終的に計一百二十四篇に和韻した。[1] 即ち、蘇軾晩年の代表作「和陶詩」である。その間の紹聖四年（一〇九七）、恵州から海南島に再謫された蘇軾は、同時期に雷州に遷された三歳下の弟蘇轍（字は子由）に書簡を寄せ、「和陶詩」を集めた詩集の序文作成を依頼した。

是時、轍亦遷海康、書來告曰「古之詩人有擬古之作矣、未有追和古人者也。追和古人則始於東坡。吾於詩人無所甚好、獨好淵明之詩。淵明作詩不多、然其詩質而實綺、癯而實腴。自曹・劉・鮑・謝・李・杜諸人皆莫及也。吾前後和其詩凡百數十篇、至其得意、自謂不甚愧淵明。今將集而并錄之、以遺後之君子。子爲我志之。……」是の時、轍も亦た海康に遷るに、書来りて告げて曰く「古の詩人に擬古の作有るも、未だ古人に追和する者有らざるなり。古人に追和するは則ち東坡に始まる。吾は詩人に於いて甚だ好む所無く、独り淵明の詩を好むのみ。淵明の詩を作ること多からざるも、然るに其の詩 質にして実は綺、癯にして実は腴たり。曹〔植〕・劉〔楨〕・鮑〔照〕・謝〔霊運〕・李〔白〕・杜〔甫〕より諸人皆及ぶこと莫し。吾 前後其の詩に和すこと凡そ百数十篇、其の意を得るに至り、自ら謂ふに甚だしくは淵明に愧ぢず。今将に集めて之に并録し、以て後の君子に遺さんとす。子 我が為に之を志せ……」と。　　蘇轍「子瞻和陶淵明詩集引」（『欒城後集』巻二十一）[2]

王水照氏は、晩年の蘇軾が杜甫の陶淵明観の偏向に反駁したことを指摘し、「他以前曾從政治上推重杜甫爲〝古今

詩人〟之首（《王定國詩集叙》）、現在又從藝術上認爲杜於陶詩的〝高風絶塵〟有所不及、並進而以陶淵明壓倒一切詩人。他對陶詩的〝平淡〟作了深得藝術辯證法的闡發。[3]」と、蘇軾は以前は政治的な視角によって杜甫を最も重要視したが、晩年に至っては、その詩の芸術性という点においても、杜甫ではなく陶淵明をして他を圧倒する詩人としたと述べる。それまでの陶淵明は「隠逸詩人」として生きた処世に注目が集まり、詩の評価は然程高くなかったが、蘇軾は陶淵明詩を最高峰としてそれに継和し、その詩集を「後の君子」に遺すことを望んだのである。

また、蘇軾は「和陶詩」の多くを同志に寄せ、彼らに継和を求めたが、これも後世に遺すことを意識したものと言える。蘇軾が他者に寄せた「和陶詩」の総数は一百首、そのうち蘇轍に対するものが六十五首と最多であり、[4]黄庭堅（字は魯直、号は山谷道人）・秦觀（字は少游）・晁補之（字は無咎）・張耒（字は文潜）、即ち「蘇門四学士」を始めとする門人にも「和陶詩」を寄せて継和を促し、彼らもそれに応じた。しかし、黄庭堅は四学士の中で唯一「和陶詩」を詠んだ形跡がなく、管見の及ぶ限り、かかる黄庭堅の蘇軾「和陶詩」に対する姿勢について論究するものは見られない。本稿ではそれを分析することで、蘇黄の文学観や関係性の一面を明らかにしたいと思う。

一、蘇軾による陶淵明「歸去來兮辭」の継和

今に伝わる『東坡先生和陶淵明詩』全四巻において、巻頭には「飲酒二十首」が、巻末には「歸去來兮辭」が配された。元符元年（一〇九八）六月、蘇軾は「蓋以無何有之鄉爲家。雖在海外、未嘗不歸、云爾（蓋し無何有の鄉を以て家と為す。海外に在りと雖も、未だ嘗て帰せずんばあらずして、爾か云ふ）」と序し、その決意を表した。

歸去來兮　　請終老於斯游　　帰りなんいざ、斯の游に終老せんことを請ふ。
我先人之弊廬　　復捨此而焉求　　我が先人の弊廬、復た此を捨てて焉くにか求めん。
均海南與漠北　　挈往來而無憂　　海南と漠北とを均しくし、挈へて往来するも憂ふること無し。

最南端の孤島に再謫された蘇軾は、我が身の不自由さや時間の移りゆく速さについて悲嘆に暮れながら、そこでの生活や交遊、それによって得た透徹した心情を詠み表した。そして、彼はこの海南島における客遊をもって人生

を終わりたいと望むに至る。それは、彼がこの地こそが「我が先人の弊廬」、即ち尊敬する陶淵明の住まう粗末な家屋と同様の終の住処であると判断したためであった。蘇軾はこの辞を次のように結んだ。

已矣乎　吾生有命歸有時　已んぬるかな、吾が生に命有り 帰するに時有り。
我初無行亦無留　駕言隨子聽所之　我初めより行く無く亦た留むる無し、駕して言(ここ)に子に随ひ之(ゆ)く所に聴(まか)す。
豈以師南華　而廢從安期　豈に南華を師とするを以て、安期に従ふを廃せんや。
謂湯稼之終枯　遂不漑而不耔　謂(おも)へらく湯稼の終に枯るるは、遂に漑(そそ)がずして耔(つちか)はざるにあり。
師淵明之雅放　和百篇之清詩　淵明の雅放を師とし、百篇の清詩に和す。
賦歸來之新引　我其後身蓋無疑　帰来の新引を賦せば、我 其の後身たること蓋し疑ひ無し。

蘇軾「和陶歸去來兮辭」（『和陶詩集』巻四）

蘇軾は生死が定まった有限の人生において、時機を逸せずに帰隠することの重要性を詠み、その帰隠すべき時が海南島に流謫された現在であるとした。彼は「雅」と「放」の両面を有する陶淵明の処世を模範とし、それが表れた一百篇以上の詩歌に和韻し、遂に「歸去來兮辭」の継和に及んだことを誇示した。それにより、蘇軾は己を陶淵明の生まれ変わりであると宣言したのである。蘇軾はこの「歸去來兮辭」の継和を門人たちに促した。

従来の唱和詩は原詩の詩意や修辞を踏まえることを基本とするが、蘇軾は陶淵明への敬意は明らかながら、原詩に応えることに然程拘泥せず、自らの境遇と心情を詠むことに主眼を置き、他者に継和を求める際にも内容や表現を規制することはなかった。政和元年（一一一一）八月二十日、門人の李之儀（字は端叔）は次のように回想した。

予在潁昌、一日從容、黄門公遂出東坡所和。不獨見知爲幸、而於其卒章始載「其後身盡和」。平日談笑、間所及、公又曰「家兄近寄此作、令約諸君同賦、而南方已與魯直・少游相期矣。二君之作未到也。」居數日、黄門公出其所賦、而輒與牽強。後又得少游者、而魯直作與不作未可知、竟未見也。張文潛・晁無咎・李方叔亦相繼而作、三人者雖未及見、其賦之則久矣、異日當盡見之。

予 潁昌に在りしとき、一日従容たり、黄門公（蘇轍）遂に東坡の和する所を出だす。独り見知して幸ひと為すのみならず、而(しか)も其の卒章に始めて「其の後身にして尽く和せり」と載す。平日談笑して、間ま及ぶ所あり、

公又た曰く「家兄近く此の作を寄せ、諸君の同に賦するを約せしめんとし、南方にて已に魯直・少游と相ひ期せり。二君の作未だ到らず」と。居ること数日、黄門公 其の賦する所を出し、輒ち牽強を与ふ。後に又た少游の者を得るも、魯直の作るか作らざるかは未だ知るべからずして、竟に未だ見ず。張文潜・晁無咎・李方叔も亦た相ひ継いで作り、三人の者は未だ見るに及ばずと雖も、其の之を賦すこと則ち久し、異日当に尽く之を見るべし。

李之儀「跋東坡諸公追和淵明歸去來引後」（『姑溪居士後集』巻十五）[5]

即ち、蘇轍は李之儀に蘇軾「和陶歸去來兮辭」を示し、また、蘇軾が「諸君の同に賦するを約せしめん」として、まず蘇轍と黄庭堅、秦観に継和を求めた経緯を語った。そして、蘇轍もまたここで自らが和韻した「歸去來兮辭」を示し、他の門人に「歸去來兮辭」の継和を強く促したのである。これは、彼らの経歴に鑑みて建中靖国元年（一一〇一）十月から翌崇寧元年（一一〇二）の間のことであり、実際にこれを受けて崇寧元年（一一〇二）に李之儀は継和しており、後に張耒・晁補之等も継和した。また、現存しないが、李廌（字は方叔）と釈道潜（号は参寥子）の作もあったという。[6] しかし、黄庭堅については、李之儀は「魯直の作るか作らざるかは未だ知るべからずして、竟に未だ見ず」と述べる。崇寧四年（一一〇五）九月三十日に亡くなった黄庭堅はこのとき故人であったが、元祐党禁によってその別集は禁書とされていた。それ故、李之儀は黄庭堅が「歸去來兮辭」に継和したか否か不明であると書いたのであろうが、現存する別集や後世の資料にも黄庭堅が継和した形跡は見えない。結局、彼は「和陶詩」を創作しなかったのである。

作者	創作時期	年齢	作品名（各別集における巻数）
秦観	元符三年（一一〇〇）	52	「和淵明歸去來辭」（『淮海集』巻一）
晁補之	元祐七年（一〇九二）	40	「飲酒二十首、同蘇翰林先生次韻追和陶淵明」（『雞肋集』巻四）
	崇寧元年（一一〇二）～	50～	「追和陶淵明歸去來辭」（『雞肋集』巻三）
張耒	紹聖三年（一〇九六）	43	「次韻淵明飲酒詩」（『柯山集』巻七）
	崇寧元年（一一〇二）～	49～	「和歸去來詞」（『柯山集』巻五）
李之儀	崇寧元年（一一〇二）	55	「次韻子瞻追和歸去來」（『姑溪居士後集』巻十三）

二、黄庭堅による蘇軾「和陶詩」の顕彰

後に江西詩派の領袖と見なされた黄庭堅は江西の洪州分寧の出身であり、江西の江州九江の人である陶淵明に親近感と尊崇の念を持っていた。例えば、元豊三年（一〇八〇）十二月、江州の旧彭沢県に宿泊した彼は、県令であった陶淵明を追懐して詩を詠んだ。当時、黄庭堅は三十六歳、既に元豊元年（一〇七八）に蘇軾の知遇を得ていた。

潛魚願深眇　淵明無由逃
彭澤當此時　沉冥一世豪
司馬寒如灰　禮樂卯金刀
歳晩以字行　更始號元亮
凄其望諸葛　骯髒猶漢相
時無益州牧　指揮用諸將
平生本朝心　歳月閲江浪
空餘詩語工　落筆九天上
向來非無人　此友獨可尚
屬予剛制酒　無用酌杯盎
欲招千載魂　斯文或宜當

潛魚は深眇を願ふも、淵 明らかにして逃るる由無し。
彭沢 此の時に当たりて、一世の豪を沉冥にす。
司馬 寒きこと灰の如く、礼楽は卯金刀たり。
歳晩 字を以て行はるるも、更始して元亮と号す。
凄其として諸葛を望み、骯髒として猶ほ漢相のごとし。
時に益州牧の、指揮して諸将を用ふること無し。
平生 本朝の心、歳月 閲すること江浪のごとし。
空しく余す 詩語の工、筆を落とす 九天の上。
向来 人無きに非ざるも、此の友 独り尚ぶべし。
属予（このころ） 剛く酒を制し、用て杯盎を酌むこと無し。
招かんと欲す 千載の魂、斯文 或は宜当せん。

黄庭堅「宿舊彭澤、懷陶令」（『山谷詩集注』巻一）[7]

「潛」「淵明」「彭沢」「元亮」という陶淵明の名や字、通称などを詩語として駆使しつつ、彼の時勢に乗らずに「本朝の心」、即ち晋朝に対する忠誠を貫いた精神性を賞賛した。そして、江の浪のように時が過ぎた今、陶淵明の巧みなる詩語が遺ったという。このように、黄庭堅にとって陶淵明の剛直にして潔い精神性及びそれを巧みに表す詩語の妙は、感銘を受けるものであったと言える。更に、黄庭堅は元祐二年（一〇八七）に晁補之のために「卧陶軒」詩を詠み、以後も陶淵明に因んだ作を幾首か創作したが[8]、後年、その敬意は一層深くなった。

蘇軾が黄庭堅と秦観に「和陶歸去來兮辭」を寄せたのは元符元年（一〇九八）六月から元符三年（一一〇〇）六月までの間のことであるが、元符元年（一〇九八）六月に黄庭堅は黔州から戎州に、九月に秦観は横州から雷州に再謫され、元符三年（一一〇〇）四月に恩赦によって北帰が許されるまでそれぞれ配所での生活が続いた。そして、この頃の黄庭堅が後学の者を指導するために、独自の詩論を究めたことは有名である。彼は「但當以理爲主。理得而辭順、文章自然出羣拔萃（但だ当に理を以て主と為すべきのみ。理得て辞順ひ、文章自然に群より出で萃より抜んず）」[9]と主張し、そのためにまず優れた古人の作を精読することを勧めた。黄庭堅の云う「理を以て主と為」した最高の詩人は「杜甫」であり、彼は杜甫詩の用字の一つ一つから全体の構成・意境に至るまで全過程を綿密に祖述した。そして、杜甫に次ぐ学ぶべき詩人として陶淵明を挙げる。

拾遺句中有眼　彭澤意在無弦　　拾遺の句は中に眼有り、彭沢の意は弦無きに在り。
顧我今六十老　付公以二百年　　我を顧みるに今六十の老たり、公に付すに二百年を以てす。

黄庭堅「贈高子勉四首」其四（『山谷詩集注』巻十六）

即ち、崇寧元年（一一〇二）、荊州にて新進気鋭の高荷（字は子勉）と詩の応酬を行った際、黄庭堅は杜甫の詩眼の素晴らしさとともに陶淵明の詩意の自然さに学ぶことを諭したのである。但し、杜甫を最高峰とし、陶淵明を次位とする黄庭堅の主張は、陶淵明を随一と見なす蘇軾とは異なり、また、黄庭堅の表現技巧の厳密性と「理」を重んじる姿勢は内省的な志向を表すもので、これも総じては蘇軾とは正反対と言える。元来、蘇黄には文学創作における方向性の相違が見えるが[10]、彼らはその相違を認め合っており、蘇軾は黄庭堅の陶淵明詩に学ぶ姿勢を評価していたからこそ彼に「和陶歸去來兮辭」を寄せて激励しつつ、継和を求めたのであろう。

では、黄庭堅は蘇軾「和陶詩」を如何に評価したのか。建中靖国元年（一一〇一）四月、彼は次のように評した。

觀十年前書、似非我筆墨耳。年衰病侵、百事不進、惟覺書字倍蓰增勝。復於范君仲處、見東坡惠州自書所和陶令詩一卷。詩與書皆奔軼絶塵、不可追及、又悵然自失也。建中靖國元年四月己未。

十年前の書を観れば、我の筆墨に非ざるが似きのみ。年衰へて病に侵され、百事進まざるも、惟だ書字のみ倍蓰し増ます勝るを覚ゆ。復た范君仲の処に於いて、東坡の恵州の自ら陶令の詩を和する所を書する一巻を見る。

詩と書と皆奔軼絶塵にして、追及するべからず、又た悵然として自失するなり。建中靖国元年四月己未。

黄庭堅「再跋」（『山谷別集』巻十二）[11]

これは「元祐間、大書淵明詩、贈周元章」に再跋したもので、時期は謫地の戎州から荊州に至った前後にあたる。「范君仲」は范祖禹（字は純父）の長子范沖（字は元長）のことで、元来は「范君」に「沖」と注されていたのであろう。[12] 黄庭堅は、蘇軾の姻戚である范家の所有する、蘇軾直筆の「恵州和陶詩」一巻を見て、その内容と筆勢に圧倒され、それに追いつくことはないと痛感したという。彼はまた、以下の詩を詠んだ。

子瞻謫嶺南　時宰欲殺之　子瞻　嶺南に謫せられ、時宰　之を殺さんと欲す。
飽喫惠州飯　細和淵明詩　飽くまで喫す　恵州の飯、細かに和す　淵明の詩。
彭澤千載人　東坡百世士　彭沢は千載の人、東坡は百世の士なり。
出處雖不同　風味乃相似　出処は同じからずと雖も、風味は乃ち相ひ似たり。

黄庭堅「跋子瞻和陶詩」（『山谷詩集注』巻十七）

ここで「飽くまで喫す　恵州の飯、細かに和す　淵明の詩」とあるように、当時の黄庭堅が閲覧したのは恵州における蘇軾の「和陶詩」である。これは崇寧元年（一一〇二）八月以後の作とも言われるが、黄溍『山谷年譜』はこれを建中靖国元年（一一〇一）の作とし、「先生有眞蹟石刻、題云『建中靖國元年四月、在荊州承天寺、觀此詩卷、歎息彌日。作小詩、題其後』（〔山谷〕先生真蹟の石刻有り、題して『建中靖国元年四月、荊州承天寺に在りしとき、此の詩巻を観て、歎息すること日を弥る。小詩を作り、其の後に題す』と云ふ）」と資料を挙げた。[13] 時期に鑑みて黄庭堅の云う「此の詩巻」は范家所有の「恵州和陶詩」一巻のことで、彼はそれに「跋子瞻和陶詩」を題書したのである。黄庭堅は詩中で蘇軾が恵州に謫せられた要因と、そこで「飯」と「詩」を楽しむ悠然たる様を詠み、陶淵明・蘇軾の処世と文学の永遠性を並べて称揚した。蘇轍は「子瞻和陶淵明詩集引」にて、仕官と帰隠における身の処し方を異とする蘇軾が陶淵明に倣うことに異論があろうと指摘しつつ、「後世の君子」は蘇軾の処世を参考とするだろうと予言した。[14] 黄庭堅が「跋子瞻和陶詩」にて陶淵明と蘇軾の「出処」の相違を指摘したのはそれを踏まえたものであり、彼も蘇軾の処世は陶淵明と異なるが故の深い含蓄があると感じたのである。その上で、彼は「風味」、即ち

陶淵明と蘇軾の悠々たる精神と詩風の相似を称賛したのであった。当時の黄庭堅は既に蘇軾から「和陶歸去來兮辭」を寄せられていたが、それでも継和しなかった。この「恵州和陶詩」について「詩と書と皆奔軼絶塵にして、追及するべからず」と思い、「又た悵然として自失」し、「歎息すること日を弥(わた)」ったと述懐したように、彼は、蘇軾が更なる境地を詠んだと自負する「和陶歸去來兮辭」に追和しようとは思えなかったのではないか。

三、蘇軾による李白「潯陽紫極宮感秋作」の継和

建中靖国元年（一一〇一）七月二十八日、蘇軾は常州にて病歿した。蘇轍は同年十月に「追和陶歸去來兮辭」を詠んで蘇軾を哀悼した後[15]、蘇門の門人に「歸去來兮辭」の和韻を勧めた。そのうちの一人である張耒は「耒輒自憫其仕之不偶、又以弔東坡先生之亡、終有以自廣也（耒は輒ち自ら其の仕の不偶なるを憫(うれ)ひ、又た以て東坡先生の亡するを弔ひ、終に以て自ら広むること有り）」と序して継和した[16]。崇寧元年（一一〇二）七月、張耒は「出己俸於薦福禪院、爲軾飯僧、縞素而哭（己の俸を薦福禪院に出して、軾の為に僧に飯し、縞素もて哭）」したとして弾劾され[17]、同年九月から崇寧五年（一一〇六）十一月まで黄州に謫居していた。張耒の継和は「自ら其の仕の不偶なるを憫(うれ)」うる内容からこの黄州流謫の時期に行われたと推測され、蘇轍と同様に蘇軾への追悼文でもある。

蘇軾の訃報は間もなく常州から黄庭堅に伝えられ、同年十二月二十四日には蘇轍からも書簡が寄せられたという。翌崇寧元年（一一〇二）春、黄庭堅は蘇轍への返信において、弟妹など親族と蘇軾の死が相次いだことによる心身の荒廃から蘇軾追悼のための詩文創作も果たせない現状を吐露しつつ、夏秋の間には再会を期する旨を述べた[18]。前掲の李之儀の言によると、蘇轍は門人に「歸去來兮辭」の継和を促しつつ、「二君（黄庭堅・秦観）の作」を待望していた。因みに、秦観は元符三年（一一〇〇）六月に雷州にて蘇軾と再会して別れた後、七月になって北帰の喜びを主題に継和している。秦観は八月に途上の藤州で急逝したが、蘇轍も後に彼の継和詩を入手したと思われる。そして、蘇軾の遺志を継いだ蘇轍が、題跋の詩で満足するはずがなく、黄庭堅にも「牽強を与」えた可能性は高い。結果として、崇寧元年（一一〇二）八月、黄庭堅は蘇軾を追悼する継和詩を賦した。但し、それは蘇軾の「和陶詩」

ではなく、「和李詩」に継和したものであった。[19] まず、原詩である李白詩を挙げる。

何處聞秋聲　翛翛北窗竹
迴薄萬古心　攬之不盈掬
靜坐觀衆妙　浩然媚幽獨
白雲南山來　就我簷下宿
嬾從唐生決　羞訪季主卜
四十九年非　一往不可復
野情轉蕭散　世道有翻覆
陶令歸去來　田家酒應熟

何処にか秋声を聞く、翛翛たる北窗の竹。
迴薄す 万古の心、之を攬るも掬に盈たず。
静坐して衆妙を観れば、浩然として幽独に媚ぶ。
白雲 南山より来たり、我に就き簷下に宿す。
唐生に従ひて決するを嬾(おこた)り、季主を訪ねて卜するを羞づ。
四十九年の非、一たび往きて復すべからず。
野情 転(うた)た蕭散なるも、世道 翻覆有り。
陶令 帰りなんいざ、田家 酒応に熟すべし。

李白「潯陽紫極宮感秋作」（『李太白全集』巻二十四）[20]

この創作時期は「四十九年の非」を嘆く典拠より、[21] 李白五十歳の天宝九載（七五〇）秋とされ、「潯陽」は江州九江の唐代の名称であり、「紫極宮」は李白が投宿した道観であった。秋の訪れを告げる北向きの窓辺から聞こえる竹の音、これに感じ入る心情は万古より集約されたものであるが、手にとって我がものとすることは出来ない。しかし、李白はその自然の玄妙なる様を静かに座って鑑賞し、自然が浩然としつつも自分一人を楽しませようとしてくれることに感動する。とりわけ「南山」から軒先に来たる「白雲」の様子から、李白は自分の来し方を回顧した。そこで、彼は智者の助言を求めずに空しく四十九年の春秋を重ねた自らの非を恥じながら、その年月が戻ってくることはないと嘆いた。そして、李白がこれまでの人生の中で痛感したのは、自然の寄せる情は清爽で解しやすいが、世間の道理は転変するために、心の平安を得られないということであった。故に、この陶淵明縁の地において、陶淵明のように自然を愛で、酒を楽しむ自由な境地に帰ろうではないかと詠んだのである。

蘇軾がこれに和韻した経緯は、自序に見える。元豊七年（一〇八四）七月、黄州を離れた蘇軾が江州九江を通過した際、かつての「紫極宮」たる「天慶観」に立ち寄った。そこで道士胡洞微にその師の卓玘が刻した李白詩の石本を見せられたが、中でも「四十九年の非、一たび往きて復すべからず」の詩句に感動し、和韻詩を賦したという。[22]

時に蘇軾は四十九歳であった。その際、蘇軾は、胡洞微から生前の卓玘が植えた、薬効のある玉芝（瓊田草）を示され、数年後に食せると聞き、次のように詠んだ。

寄卧虚寂堂　月明浸疏竹
冷然洗我心　欲飲不可掬
流光發永歎　自昔非余獨
行年四十九　還此北窗宿
緬懐卓道人　白首寓醫卜
謫仙固遠矣　此士亦難復
世道如弈棋　變化不容覆
惟應玉芝老　待得蟠桃熟

寄卧す　虚寂堂、月明　疏竹を浸す。
冷然として我が心を洗ひ、飲まんと欲するも掬すべからず。
流光　永歎を発するも、昔より余独りに非ず。
行年　四十九、此の北窗に還りて宿す。
緬（はる）かに懐ふ　卓道人、白首　医卜に寓す。
謫仙は固より遠く、此の士も亦た復すること難し。
世道　弈棋の如く、変化して覆するを容れず。
惟だ玉芝の老するに応へ、蟠桃の熟するを待ち得んのみ。

蘇軾「和李太白幷敘」（『蘇軾詩集』巻二十三）

天慶観の虚寂堂に投宿した蘇軾は、清らかなる明月の光が疏竹に注ぐ様を見た。それは心を洗うような風情であったが、それを飲み干そうとも手に掬うことが出来ない。この自然を我がものとし得ないという蘇軾の慨嘆は李白のそれと同様であり、四十九歳の蘇軾は、ほぼ同齢の李白が竹の音を聞いた北向きの窓辺にあって、李白とその詩を刻した卓玘を追憶し、自らの人生を顧みた。そして、蘇軾も李白のように世俗における筋道は博弈の如く変化し続けて元に戻らないものとし、自らは卓玘が植えた玉芝や、仙桃の食べ頃を待つばかりだと結んだ。李白は「潯陽紫極宮感秋作」を詠んだ七年後の至徳二年（七五七）春、安史の乱の際に永王璘の軍に招来されていたことで大逆罪に問われて潯陽の獄に繋がれ、翌乾元元年（七五八）春には夜郎に流された。その途上で特赦に遭って引き返し、巴陵を経て江夏に滞在し、上元元年（七六一）に潯陽に帰還した。この時の蘇軾も、元豊二年（一〇七九）八月から十二月までの「烏台詩案」による投獄、更に翌年正月から四年にも亘った黄州への流謫など、数々の苦難を経て、帰還する途上にあった。蘇軾がこの「潯陽」の地にあって、そうした李白の人生にも思いを致したことは明らかである。その上で、蘇軾も李白のように自然の恩恵を享受することで心の平安を得ようと考えたのである。[23]

四、黄庭堅による蘇軾「和李詩」の追和

黄庭堅による蘇軾「和李太白」詩の追和は、蘇軾の死の約一年後に行われた。崇寧元年（一一〇二）六月九日、黄庭堅は知太平州に着任するものの、九日で免職となり、管句洪州玉隆観に任ぜられ、即日出立した。その途上、彼は江州に立ち寄り、八月初三日に天慶観を訪れたのである。

不見兩謫仙　長懐倚脩竹　　両謫仙に見えず、長へに懐ひて脩竹に倚る。
行遶紫極宮　明珠得盈掬　　行きて紫極宮を遶り、明珠 掬に盈つるを得たり。
平生人欲殺　耿介受命獨　　平生 人殺さんと欲するも、耿介として命を受くること独りなり。
往者如可作　抱被來同宿　　往く者 如し作すべくんば、被を抱きて来同宿せん。
砥柱閲頽波　不疑更何卜　　砥柱 頽波を閲す、疑はずして更に何をかトせん。
但觀草木秋　葉落根自復　　但だ観る 草木の秋、葉落ちて根自ら復せるを。
我病二十年　大斗久不覆　　我病みて二十年、大斗久しく覆せず。
因之酌蘇李　蠏肥社醅熟　　之に因りて蘇李に酌まん、蠏肥へて社醅熟せり。

黄庭堅「次蘇子瞻和李太白「潯陽紫極宮感秋」詩韻、追懐太白・子瞻」（『山谷詩集注』巻十七）

「両謫仙」たる李白と蘇軾が訪れた天慶観に在りながら、かの二人に見えることが叶わない黄庭堅は、この道観を巡りつつ、そこで詠まれた李白の詩と蘇軾の和李詩があたかも「明珠」を手に掬ったかのような美の集約であることを思い、充足感を覚えた。そこから、黄庭堅は二人の人生と自らの在り方に思いを巡らせる。かつて黄庭堅は「跋子瞻和陶詩」の尾聯において「出処は同じからずと雖も、風味は乃ち相ひ似たり」と詠んだが、この追和の作は、それを踏まえたものであろう。黄庭堅は陶淵明と蘇軾の「出処」を「同じからず」としたが、巴蜀に生まれ育った「両謫仙」の李白と蘇軾が時の有力者から殺意を抱かれながらも、毅然と運命を受け容れたと評するように、李白と蘇軾は「出処」こそが相似すると感じたのである。そして、黄庭堅は、死者たる二人を生き返らせることが出来るなら、ここに「同宿」したいと願った。それは、生前に「独り」であった二人を深く理解する者であることを自任

していたからである。黄庭堅は、李白も蘇軾も生前は毀誉褒貶が激しく流転の人生を歩んだが、黄河の中流に立つ底柱山のように迷いなく道を守った彼らの真価は草木が秋になって根に帰るように、自ずと定まるものと見た。元豊七年（一〇八四）に黄庭堅が病の故に願文を書いて完全に酒肉を断ってから約二十年を経たが、蘇軾が李白詩に和韻してからも同数の年月が経過した。禁酒中の黄庭堅は酒を酌む大杓を久しく使用していないが、ここではそれを破っても蟹や酒を李白・蘇軾に供えようと詠んだのである。李白・蘇軾の詩は「世道」「北窗」「四十九」の詩語が共通し、自らの四十九年の人生の非を悔悟し、先人のように自然に回帰せんことを主題に詠むが、黄庭堅詩には両詩と共通する詩語がなく、主に李白と蘇軾の文学・処世の在り方を追懐し哀悼する内容となっている。

江州九江において蘇軾を偲ぶのであれば、約二十年も前の「和李太白」詩より、最晩年に蘇軾が切望した「歸去來兮辭」に追和する方が相応しかったかも知れない。それにも関わらず黄庭堅が「和李詩」の追和を選択したのには、彼が蘇軾「和陶詩」に「追及するべからず」と思ったことや、図らずも蘇軾の死の一年後に「天慶観」を訪れ、その天慶観に詩を遺した「李白」の処世との相似性を以て蘇軾を称えようとしたことなどに起因するのは確かであるが、加えてこれが「歸去來兮辭」を想起するものであったことも一因であろう。原詩たる李白詩は、蘇軾が感動したという「四十九年の非、一たび往きて復すべからず」の後、潯陽を故郷とする陶淵明に思いが及び、「陶令 帰りなんいざ、田家 酒応に熟すべし」と結ばれる。即ち、我が半生を悔いた李白が潯陽にて帰隠を標榜した際、その思いを陶淵明の「歸去來兮辭」の重要な詩語である「歸去來（帰りなんいざ）」を以て表したのである。[24] つまり、一連の「和李詩」は、原点から「歸去來兮辭」に因む「和李詩」を詠み、それらを蘇軾に供えたことは、黄庭堅にとって覚悟と自負の表れでもあった。黄庭堅は「和李詩」を詠んだ五日後、次の詩を詠んでいる。[25]

邀陶淵明把酒椀　送陸修静過虎溪　　陶淵明を邀へて酒椀を把り、陸修静を送りて虎溪を過ぐ。
胸次九流清似鏡　人間萬事醉如泥　　胸次の九流 清きこと鏡に似たり、人間の万事 酔ふこと泥の如し。

黄庭堅「戲效禪月作遠公詠幷序」（『山谷詩集注』巻十七）

廬山に陶淵明を招いて酒を楽しみ、陸修静のために虎溪を過ぎて見送ったという慧遠の風貌を詠み、その胸臆が

鏡のように清らかである一方、これを「破戒」とした世間においては、彼を「酔ふこと泥の如」き様であると見なしたという。ここで黄庭堅は、自らと慧遠、蘇軾と陶淵明を重ねたのではないか。陶淵明・陸修静のために酒を用意し虎渓を越えて見送りをした慧遠の行為は戒律を破るものであったが、黄庭堅の行為もある種の破戒と見なされる可能性は高かった。実際、張耒は蘇軾の死に際して哀哭し服喪したために、崇寧元年（一一〇二）七月に弾劾され、黄州に左遷されている。しかし、黄庭堅は自ら課した禁酒の戒のみならず、世の禁令を破っても「謫仙」たる蘇軾に酒食を捧げて供養したのである。また、第二章に挙げた、元豊三年（一〇八〇）十二月作の「宿舊彭澤、懐陶令」の結びに「属（このころ）予 剛く酒を制し、用て杯盌を酌むこと無し。招かんと欲す 千載の魂、斯文 或は宜当せん」とあり、酒を節制していた黄庭堅は、酒ではなく自らの詩によって「千載の魂」たる陶淵明を招こうとしたが、それが陶淵明の意に適うかを思案したという。その二十数年後、彼は九江の天慶観にて「歸去來兮辭」の継和を望んだ蘇軾の意に沿うために、「歸去來兮辭」の追和に代わる追悼の詩を詠み、蘇軾の魂に捧げたのであった。

後世、「和陶詩」と同様に、この「和李詩」に継和する者もいた。南宋の李綱・劉克荘・謝枋得、元の方回、明の文徴明などである。[26] 最初にこの「和李詩」の継承に着目したのは、宋末元初を生きた蔡正孫（字は粋然）である。彼は宋の遺臣として名高い謝枋得（字は君直、号は畳山）の門人であり、「和陶詩」の注釈書である『精刊補註東坡和陶詩話』十三巻を著した人物でもあった。彼が己丑年（一二八九、元の至元二十六年）に刊行した『詩林廣記』の前集巻三に李白「潯陽紫極宮感秋」が採録され、それに附する形で「附蘇東坡和」、「附黄山谷和」、「附劉後村和」、「附謝疊山和」と、各々の詩が並記されている。[27] 特に、謝枋得の詩は別集『疊山集』に未収録の、『詩林廣記』にのみ見える作である。蔡正孫は謝枋得の継和詩に「愚謂、疊翁此詩、清峭典雅、與諸老作眞可齊驅並駕也（愚謂（おもふ）に、疊翁の此の詩、清峭典雅にして、諸老の作と真に斉駆並駕すべきなり）」と注した。謝枋得詩の評価の妥当性はここでは論じないが、「諸老」とは李白に継和した蘇軾・黄庭堅・劉克荘（字は潛夫、号は後村居士）を指し、謝枋得の作をして彼らに「真に斉駆並駕すべき」とした評は、この「和李詩」の継和が如何にして行われていたのかを表す。謝枋得と同時代を生きた方回も継和する際、「潯陽紫極宮、即今天慶觀。太白賦感秋詩、東坡和之、山谷又和之。後人不容措手矣、近數有和者、予亦用韻寓感（潯陽紫極宮は、即ち今の天慶観なり。太白 感秋の詩を賦し、東坡之に

和し、山谷も又た之に和す。後人は容に手を措くべからざるも、近く数ば和する者有り、予も亦た用韻して感を寓す）」と述べているように、安易に継和すべきではないと見なされていたらしい。「和陶詩」、特に「歸去來兮辭」の継和については、蘇軾が表現技巧や主題の踏襲などを求めず、ともに陶淵明の如き帰隠を志さんとして、門人たちの継和を奨励し、蘇軾の歿後は蘇轍がその遺志を継ぎ、以後の文人も続いた。しかし、この「和李詩」については、当然ながらそのような蘇軾の言質は無く、黄庭堅が後学の者に継和を促すことも無かった。故に、「李白－蘇軾－黄庭堅」の後に続くほどの高度な表現技巧や強い動機付けが必須条件とされ、その結果、元代に至ってはかかる暗黙の条件も緩和されつつあったが、やはり為し難かったことが窺える。

結　論

蘇軾を師とする文人集団――蘇門は主に元祐年間（一〇八六～九三）に確立したもので、彼らは旧法党に属したため、その全盛期が終結した紹聖元年（一〇九四）以後には軒並み謫遷された。建中靖国元年（一一〇一）に新法党・旧法党の融和が図られたが、翌崇寧元年（一一〇二）には元祐党禁が起こり、以後、蘇軾や蘇轍、および蘇門四学士の学術・文学は禁書に処された。かかる状況下で蘇軾が「和陶詩」の創作を決意し、更に蘇軾・蘇轍が門人に「和陶詩」、特に「歸去來兮辭」の継和を広めようとした背景には、一門の結束を強化しようという政治的意図もあったことは否めない。しかし、その第一義は一門の師として陶淵明の詩境や処世観の共有を図ることで門人たちを慰め、その苦しみから解放する手段を示すことにあった。

蘇門の筆頭とされる黄庭堅は、陶淵明に尊崇の念を持ち、かつ蘇軾から「和陶歸去來兮辭」を寄せられ、継和を求められたにも関わらず、それを行わなかった。それはおそらく蘇軾の「和陶詩」に及ぶものを自らは創作し得ないと判断したためであり、故に「跋子瞻和陶詩」によって蘇軾の「和陶詩」そのものを顕彰することにしたのである。そして、蘇軾の歿後には、蘇轍からも「歸去來兮辭」の継和を促されたと見られるが、黄庭堅は敢えて蘇軾が約二十年前に李白「潯陽紫極宮感秋作」に和した作に追和することを選んだ。彼は「歸去來兮辭」を連想し得る、

蘇軾の処世に似た李白の詩に追和して、蘇軾の遺志に応えようとしたのである。蘇門においても異色と言える、こうした黄庭堅の「和陶詩」に対する姿勢、特に単独で行った「和李詩」による蘇軾追悼の詩は、時に文学創作における志向や詩論の相違を認め合い、その文才を高め合いながら、それぞれが宋代の文学史上に大きな足跡を残した蘇黄の師弟関係の一面を表すものであったと言えよう。

注

（1）蘇軾の「和陶詩」は畳韻の作も含めると、総計一百二十五首になる。その詩集については、蘇轍「亡兄子瞻端明墓誌銘」（『欒城後集』巻二十二）に「公詩本似李杜、晩喜陶淵明、追和之者幾遍、凡四卷」とあり、南宋黄州刊、現台湾国立中央図書館所蔵『東坡先生和陶淵明詩』全四巻（中国書店、二〇〇八年、以下『和陶詩集』と略）が存する。蘇軾・蘇轍の「和陶詩」はこれを底本とし、適宜各単行の諸本を参照。他の蘇軾の詩文は『蘇軾詩集』全八冊（中華書局、一九八二年）、『蘇軾文集』全六冊（中華書局、一九八六年）参照。

（2）蘇轍「子瞻和陶淵明詩集引」は『和陶詩集』に未収録のため『欒城後集』より引く。主な蘇轍の詩文は『蘇轍集』全四冊（中華書局、一九九〇年）参照。

（3）王水照「蘇軾創作的發展階段」（初出『社会科學戰綫』一九八四年第一期）、後に収録された『蘇軾研究』（王水照蘇軾研究四種、中華書局、二〇一五年）参照。

（4）蘇轍の「和陶詩」については、拙稿「蘇轍による蘇軾「和陶詩」の繼承」（『日本中國學會報』第六十三集、二〇一一年）に既述。

（5）李之儀『姑溪居士後集』は四庫全書本を底本とする。

（6）晁説之「答李持國先輩書」（『嵩山文集』巻十五）に「建中靖國間、東坡「和歸去來」初至京師、其門下賓客又從而和之者數人、皆自謂得意也。陶淵明紛然一日滿人目前矣。參寥忽以所和篇視予、率同賦、予謝之」とある。

（7）黄庭堅の詩は『山谷詩集注』全二冊（上海古籍出版社、二〇〇三年）を、文は『豫章黄先生文集』（台湾商務印書

館、四部叢刊正編、一九七九年）を底本とする。

（8）「卧陶軒」（『山谷詩集注』巻六）、「題伯時畫松下淵明」（同巻九）、「次韻謝子高讀淵明傳」（『山谷外集詩注』巻二）、「和答李子眞讀陶庾詩」（同巻三）、「題馬當山魯望亭四首」其一「元亮」（同巻八）等。

（9）黄庭堅「與王觀復書三首」其一（『豫章黄先生文集』巻十九）。

（10）蘇黄の詩論の相違については内山精也「黄庭堅と王安石――黄庭堅の心の軌跡――」（『橄欖』第十号、宋代詩文研究会、二〇〇一年）等参照。

（11）『山谷別集』は四庫全書本を底本とする。淳熙九年（一一八二）に黄庭堅の従孫黄罃（字は子耕）が編纂。同じく黄罃が撰述した『山谷年譜』原序に「蓋嘗編次遺文爲『別集』二十卷、然於編年無所考證」とある。

（12）「恵州和陶詩」の草稿一巻や范沖についての考察は、拙稿「蘇軾『和陶詩集』編纂考」（『日本宋代文學學會報』第三集、二〇一七年）に既述。

（13）黄罃『山谷年譜』巻二十八（『宋人年譜叢刊』五、四川大学出版社、二〇〇三年）。

（14）蘇轍「子瞻和陶淵明詩集引」に「嗟夫、淵明不肯爲五斗米一束帶見鄉里小人。而子瞻出仕三十餘年、爲獄吏所折困、終不能悛、以陷於大難、乃欲以桑榆之末景自託於淵明、其誰肯信之。雖然、子瞻之仕其出入進退、猶可考也。後之君子其必有以處之矣」とある。

（15）蘇轍「追和陶歸去來兮辭」（『和陶詩集』巻四）の序に「昔予謫居海康、子瞻自海南以「和淵明歸去來」之篇、要予同作。時予方再遷龍川、未暇也。辛巳歲（建中靖国元年、一一〇一）、予既還潁川、子瞻渡海浮江、至淮南而病、遂沒於晉陵。是歲十月、理家中舊書、復得此篇、乃泣而和之」とある。

（16）張耒「和歸去來詞」序文。「子由先生示東坡公所和陶靖節「歸去來詞」及侍郎先生之作、命之同賦」とある。

（17）『續資治通鑑』巻八十八に崇寧元年（一一〇二）秋七月庚戌のことと記載。同年冬、黄庭堅は黄州の張耒のもとを訪ね、ともに蘇軾の旧跡を巡りつつ、蘇軾を偲ぶ詩を応酬した。黄庭堅「次韻文潛」（『山谷詩集注』巻十七）に「經行東坡眠食地、拂拭寶墨生楚愴。水清石見君所知、此是吾家秘密藏」とある。張耒が蘇轍に促されて「歸去來兮辭」に継和した時期も、この黄庭堅との交遊の前後であろう。

(18) 黄庭堅「與王庠周彦書」(『豫章黄先生文集』巻十九) に「然有自常州來云『東坡病亟時、索沐浴改朝衣、談笑而化。其胷中固無憾矣、所惜子由不得一見、又未得一還鄉社。』使後生瞻望此堂堂爾。欲作詩文道其意、亦未能成」とある。また、「寄蘇子由書三首」其二(『豫章黄先生文集』巻十九) に「流落七年、蒙恩東歸、至荊州病幾死、失一弟一妹及亡弟二子、早衰氣索、非復昔時人也。……忽奉十二月二十四日所賜教、存問勤重、伏審憂患之餘。台候萬福、開慰無量。端明二丈、人物之冠冕、道德文章、足以增九鼎之重、不謂遂至於此、何勝殄瘁之悲、況手足之情。平生師友之地、荼毒封割之懐、何可堪忍、奈何所頼。諸子有所立、而季子文章、幾於斯人之不亡也。庭堅病起荒廢、恐不能辨事、欲引去而未敢。太平遂請、義當一往。來夏秋間、若病不再作、尚可祈見。無階承教、臨書懐仰」とある。

(19) 当時、「和李詩」を多数詠んだ人物として郭祥正(字は功父)がおり、四十四首の「和李詩」が伝わる。内山精也「李白の後身・郭祥正と「和李詩」」(『中国文学研究』第二十九期、早稲田大学中国文学会、二〇〇三年) に詳しい。但し、郭祥正は李白「潯陽紫極宮感秋作」には和韻していない。

(20) 『李太白全集』(中華書局、一九七七年)。上掲の書では李白「潯陽紫極宮感秋作」は「尋陽」に作るが、本稿では諸本を参照し、「潯陽」に統一する。該詩の編年については大野實之助『李太白詩歌全解』(早稲田大学出版部、一九八〇年)、『李白全集編年箋注』全四冊(中華書局、二〇一五年) 参照。

(21) 『淮南子』原道訓に「故蘧伯玉年五十而有四十九年非」とある。

(22) 蘇軾「和李太白并敘」の序文に「李太白有「潯陽紫極宮感秋」詩、紫極宮今天慶觀也。道士胡洞微以石本示余、蓋其師卓玘之所刻。玘有道術節義過人、今亡矣。太白詩云『四十九年非、一往不可復。』今予亦四十九、感之次其韻。玉芝一名瓊田草、洞微種之七八年矣、云『更數年可食。』許以遺余、故并記之」とある。

(23) 李白の原詩と蘇軾の継和詩で共通する語句は「世道」「北窗」「四十九」である。「世道」は『荘子』外篇「繕性篇」の「由是觀之世喪道矣、道喪世矣、世與道交相喪也」を典拠とし、李白・蘇軾の詩中では俗世の形骸化した道理のことであり、それが更に転変する無常を詠む。「北窗」は陶淵明「與子儼等疏」(『陶淵明集』巻七) の「常言『五六月中、北窗下卧、遇涼風暫至、自謂是羲皇上人。』意淺識罕、謂斯言可保。日月遂往、機巧好疏。緬求在昔、眇然如何」を典拠とし、陶淵明・李白・蘇軾それぞれが自然を感じ取った快適な場所とする。

(24)　李白「潯陽紫極宮感秋作」の詩句「陶令歸去來、田家酒應熟」は、陶淵明「問來使」の「歸去來山中、山中酒應熟」に拠るとされるが、「問來使」は偽作説が有力で、宋代においても洪邁『容齋五筆』巻一「問故居」に「陶淵明「問來使」詩云……諸集中皆不載、惟晁文元家本有之。蓋天目疑非陶居處。然李太白云『陶令歸去來、田家酒應熟』、乃用此爾」とあり、厳羽『滄浪詩話』「考證」に「『西清詩話』載『晁文元家所藏陶詩、有「問來使」一篇云……。』予謂此篇誠佳、然其體製氣象、與淵明不類。得非太白逸詩、後人謾取以入陶集爾」とある。李白の意図はともかく、晁迥（字は明遠、文元は謚）家蔵本以外の宋代に通行した『陶淵明集』の諸本に「問來使」は未収録であり、蘇軾・黄庭堅が意識した典拠は「歸去來兮辭」であったと言える。

(25)　黄庭堅「戲效禪月作遠公詠并序」の序文に「遠法師居廬山下、持律精苦、過中不受蜜湯、而作詩換酒、飲陶彭澤。送客無貴賤、不過虎溪、而與陸道士行過虎溪數百歩、大笑而別。故禪月作詩云『愛陶長官醉兀兀、送陸道士行遲遲。買酒過溪皆破戒、斯何人斯師如斯。』故效之」とある。

(26)　李綱「次韻和李太白感秋」（『梁谿集』巻十一）、劉克莊「十一月二日、至紫極宮、誦李白詩及坡谷和篇、因念蘇李聴竹時、各年四十九。余今五十九矣、遂次其韻」及び「答王侍郎和紫極宮詩」（『後村集』巻十六）、方回「次韻李太白併序」（『桐江續集』巻三）、文徵明「十一月六日、初度與客飲、散獨坐、誦太白紫極宮詩、有感次韻」（『甫田集』巻七）。李綱は三十七首、方回は三十首もの和陶詩を詠み、李綱は「歸去來兮辭」にも追和した。また、陸游『入蜀記』巻二の乾道六年（一一七〇）八月の記事には「四日游天慶觀。李太白詩所謂潯陽紫極宮也。蘇黄詩刻、皆不復存、太白詩有一石、亦近時俗書」とある。

(27)　蔡正孫『詩林廣記』（中華書局、一九八二年）。

※本稿は平成二十九年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究（B）「東アジアにおける蘇軾「和陶詩」の受容と発展に関する研究」（課題番号：17K13430）の交付を受けた研究成果の一部である。